



ふゆ かわら 冬の川原で、サルの顔のような模様がある枝を見たけど、何なの

模様は、葉の落ちたあと

模様のある枝に、皮をかぶったかたい芽（冬芽）が、ついていたはずですが。サルの顔のように見えたのは、葉がとれたあとで、目や口に見えるのは、水や養分を運んだ管のあとなのです。植物は、寒い冬をこすために、いろいろなくふうをしています。秋になると葉を落とし、次の年の春に、葉や花が出る新芽を用意して、冬をこす方法も、その一つです。

春から夏にかけて、木の葉の中で、緑色の葉緑素が、日光の力をかりて、水と空気中の二酸化炭素から、でんぷんなどの栄養分を作り、木はどんどん大きくなります。しかし、秋になると、日のあたる時間が短くなり、気温も下がります。根から吸い上げられる水も少なくなり、葉の葉緑素もこわれて、栄養分を作れなくなります。そして、葉のつけ根の所に「離層」とよばれるかべができ、葉がとれやすくなって、落ちていきます。

植物は、身を守るために葉を落とす

もし、栄養分を作れなくなった葉が、いつまでもついていると、せっかくなためた栄養分や少ない水を、葉に送り続けなければならない、植物全体が弱ってきます。そのため、いらなくなった葉を落とすのです。葉の落ちた後の模様の部分は、コルク質でおおわれて、守られています。クズ、サンショウ、フジなどの枝にも模様が見られます。（監修・矢野 亮）

冬芽と葉の落ちたあと



オニグルミ



アジサイ



トチノキ

